

書評 佐藤雄亮著『トルストイと「女」——博愛主義の原点』
(早稲田大学出版部、2020年、340頁)

高田 映介

トルストイ(Лев Николаевич Толстой, 1828-1910)は巨大な現象である。彼は現実世界の問題を文学作品の中で検証し、得られたこたえを再び実生活で鍛えるような、極めて特異な方法で創作した。たゆまぬ真理の追究から、500人を超える人々が織りなす壮大なロマン『戦争と平和』(Война и мир, 1863-1869)が書かれ、「内にあふれる生気を無理に閉じこめた」目をもつアンナ・カレーニナが、今なお世界で読みつかれる『イワンおのばか』(Сказка об Иване-дураке и его двух братьях, 1885)がつくられた。

文学史に輝く綺羅星を生み出した作家の人生もまた、並大抵のものではなかった。広大な領地ヤースナヤ・ポリャーナを所有する由緒正しき伯爵家の四男として生まれ、早くに両親と死に別れる。カザン大学東洋学部に進学するも馴染むことができず、法学部に転学した末に退学。19歳の若さでヤースナヤ・ポリャーナを受け継ぐと綿密な「独学計画書」に基づく「自己完成」と領地経営に苦闘した。志願兵としてカフカスに、クリミア戦争に赴き、同地で文筆活動に頭角をあらわし、ついには二つの大長編で世界的名声をほしいままにしながら、精神的な転機を迎えそれまでの一切との決別を宣言するに至る。

いわば絶頂期に在りながら、トルストイはなぜ自らの創造を否定し、棄て去ったのか。なるほど『懺悔』(Исповедь, 1882)には「転回」の理由とそこに至った経緯が記されている。「哲学への無関心と、宗教に救済の可能性を見る状態」に陥ったという、手紙の言葉もある。だが、それはあまりにも強烈な個性にとりついた妄執ではなかったか。何がそうまでしてトルストイを突き動かしたのか。この出来事を避けてトルストイを考えることはできない。そしてこの出来事を捉えるために、孫のセルゲイ・トルストイの言葉を借りるなら、彼の「個性の並外れた多面性」と彼の人生および創作に否定できぬ「矛盾」を有機的に結びつけることが必要なのだと思う。同時に、その思考を「人と作品」(Life and Work)の古典的手法への単純な回帰と一線を画すものたらしめる独自の視点が不可欠であることも想像される。これまでトルストイについて、ビュリコフの『トルストイ伝』やグーセフの『レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ:伝記のための資料』、エイヘンバウムの『若きトルストイ』といった大著をはじめ、優れた作品論や評伝が多く記されてきた。とはいえ、上述の2点を十全に掌握する分析はめずらしい。これに対し本書『トルストイと「女」:博愛主義の原点』は、トルストイの「生活と創作を結ぶ縦糸」として「内なる女性像」に着目し(1頁)、前期トルストイの生活、およびそれに密接に関わる世界観と作品群を統一的に捉えることで、いかにしてそれらが「転回」へとトルストイをみちびいたかを明らかにした点に特徴がある。

本書のいう「内なる女性像」とはどのようなものか。それは第一に、トルストイが心に抱いていた理想の女

¹ セルゲイ・トルストイ/青木明子訳『トルストイの子どもたち』成文社、2019年、265頁。

性像を指す。すなわち、「目の覚めるような美貌、こわい波うつ黒髪、野性的なまでの生命力、圧倒的に強靱で優雅な肢体、豊かな胸、あふれんばかりの愛情、強烈な官能性、傲岸なまでの誇り高さ」(2頁)をもった女性であり、トルストイはこのような女性に惹かれた。一方で、世界は幸福な家庭を基礎として調和に達することができるという信が彼にはあった。1歳11か月で母を亡くしたにも関わらず、あるいはそうだからこそ、トルストイは自らの内に慈愛に満ちた「母」の理想的イメージを作り上げ、母の愛に守られた幼年時代の完全さは彼女の肉体的な死によって損なわれるべきものではなく、不滅の「なにものか」(32頁)であるはずだと確信していたのである。

しかし、力強い「トルストイ的美女」と、家と子供のために自らを捧げる教養ある貴婦人とは、根本的に異質である。自らが求める女性像への情念が、世界の調和に達するというトルストイの宿願の実現の前に立ちふさがっていた。かくして、「完璧な女」と「理想の母」を統合し、満たされた結婚生活、家庭生活を築いて、ついにはこれを世界の理想的な生の在り方にまで拡大すること、それが作家の人生と創作を貫くテーマとなる。本書はこのような起点から出発し、歴史的状況と作家の生活に関する新たな発見と考察、『幼年時代』(Детство, 1852)、『コサック』(Казакки, 1863)、『戦争と平和』、『アンナ・カレーニナ』(Анна Каренина, 1873–1877)等名だたる傑作についての丹念で説得的な分析を両立することによって、巨人トルストイの実像を立体的に描き出している。

本書は序論と結論、および3部11章から構成されている。序論において彼の生活と創作を貫くものとして「内なる女性像」が定義され、「幼年時代の愛と調和の再建」という課題と、理想の女性像への執着がトルストイの生活と創作の動機であったとする本書の立場が明確にされる。さらに、日本のトルストイ研究の権威である藤沼貴氏の先駆的業績を除いて、本書と同様の方法を試みた先行研究は皆無に等しいことが確認される。

第1部「カフカス」では、若き日のトルストイが、搾取と暴力と死に彩られた人間存在の闇を克服し、分裂した内なる女性像を統合して理想的な生の在り方を見出すという課題が、現実の世界において不可能であると悟るまでの過程を考察する。まず、「トルストイの全創作と生涯のライトモチーフ」(33頁)として『幼年時代』がもつ意義が精査される。『幼年時代』は不滅の「なにものか」を認識しようとする最初の試みであった。作品では死と愛、そして宗教的ヴィジョンをないまぜにして、ニュートンの時間を超越した母の愛の不滅が確信される。「ママン」の特異な性質は際立っている。本書は創作過程でのママン像の変遷を追い、かつ、トルストイの実際の幼少期に見られる「不可解で暗い側面」(49頁)を考察することで、ママンは、現実の制約の中で精いっぱい「に歌われた「歌」であるとする。それは、「自分の世界像の基底であると同時に、あらゆる人にとって普遍的な意味をもつはずの問い」(65頁)であった。同時に、「幼年時代」を支えた地主貴族の生活にひそむ幻影的な魅力にトルストイがとらわれていたとする、のちの議論の重要な参照点となる指摘がなされる。

第2章以後は、大学時代、帰郷からカフカス体験に至るトルストイの生活と創作の流れをつぶさに追いながら、トルストイが独自の的方法論を確立していく道程を掘り下げていく。そして、初期創作の限界点を示すも

のとして『襲撃』(Набер, 1853)、『森を伐る』(Рубка леса, 1855)が読み解かれる。これらの作品で、のちのプラトン・カラターエフにつながるような兵士＝キリストの形象にトルストイは肉薄するが、究極的には、農民の死生観は彼には不可解なままだった。トルストイはルソーと対決し、世界は結局偶然と運命の集積にすぎないのか、と問い続ける。そこに加わったのが、コサックやチェチエンの女性によって作家の眼前に具現化した「理想の女」との邂逅がもたらした苦悩だった。評伝や回想、日記等の資料を駆使して、「理想の女」との接触はトルストイにむしろ現実を突きつけたのであり、世界の不条理さに対する疑念がいや増していったことが明らかになれる。ついに、トルストイはクリミア戦争に赴く——それは、自らの命を賭して世界をはかる「実験」であった。そして、『セヴァストーポリ物語』(Севастопольские рассказы, 1855–1856)で次のような答えにトルストイは達した。愛と調和には達しがたい。現実には理不尽で無意味である。『セヴァストーポリ物語』は成功したが、トルストイは内的には挫折した。創造の中で行き詰まったトルストイは、彼一流の仕方でも現実そのものの改革に着手した。農地解放、教育活動、農婦のアクションニヤとの恋愛。こうした現実改革から得られるものは少なくなかったとはいえ、教育活動は当局の圧力によって、農地解放と恋愛はヤースナヤ・ポリャーナで地主貴族として家庭生活を営みたいというトルストイの抜きがたい執着によって破綻する。10年の長きにわたり書きつがれた『コサック』はこの破綻の年に出版された。それは、生命力にあふれるカフカスの地での理想的生活への憧憬を、「トルストイ的美女」マリアーナとともに見果てぬ夢として葬ることに等しかった。

思想的な壁に行き当たり、現実改革にも失敗したトルストイは、理想と現実の乖離を過去の歴史的時空間において埋め合わせることを試みた。このような観点から、第2部「1812年と『戦争と平和』」が展開される。まず、これまで見落とされてきた事実として、『戦争と平和』で描かれる祖国戦争は史実とかけ離れたものであることが指摘される。祖国戦争の実態は、莫大な犠牲をとともう「高度に意識的な焦土作戦と奇想天外な陽動作戦」(184頁)だった。とはいえそのことは、トルストイの無知を意味しない。反対に、トルストイは祖国戦争について当時入手可能であった資料を網羅し、知りうる限りのことを知った上で、その歴史的事実の中から自らの意図に沿うものを選び出したのである。戦争で払われた犠牲の大きさと流された血の多さが、むしろ人々の「生を支え、一つに結びつけ」るような「大きな愛」(186頁)を生み出した。この神話と夢こそ、現実に行き詰まったトルストイが求めた突破口にほかならない。トルストイは、ピエール・ベズーホフに自己を重ね、ナターシャ・ロストフにおいて「魔性の女」と「良妻賢母」を融合しようとした。「トルストイ的美女」と「幸福な家庭」の相克がここになされたのだ。このような視座から、本書は、小説的部分と叙事的・思想的逸脱の二つに『戦争と平和』を分ける従来の単純な区分を遠く離れ、前代未聞の多層的・多元的なジャンルとして作品を再検討し、小説は「生命自体」(205頁)であると結論づける。

だが、トルストイは虚構の中に安らうことはできなかった。夢は、究極的には現実の不条理を変えてはくれない。愛してやまないヤースナヤ・ポリャーナでの地主生活も、時代の変化を受けて根本から揺るごうとしていた。地主貴族階級とその文化は破滅を運命づけられていたにも関わらず、先祖伝来の屋敷と土地を失うことにトルストイは耐えられなかった。「自分自身の生活はいうまでもなく、世界全体が矛盾を深め」(237頁)

ていくように見えていたトルストイにとって、最後の皆は、愛と調和を支えてくれるはずの大きい母性愛しかなかった。しかし、この盤石の基盤までもが疑惑の対象になってしまう。第3部『アンナ・カレーニナ』では、これまでの研究では触れられることの少なかった、トルストイの人生に起きた2つの衝撃的な事件を考察することで、以前にはそれほど深刻には思われなかった女性の「エロス」と「母性」の矛盾が、トルストイの中で前景化していったことを明らかにする。その上で、対立的なこの2つの要素を調和させる試みとして『アンナ・カレーニナ』が論じられる。美貌とエロス、高い精神性と知性に、ゆたかな母性を持ち合せたアンナこそ、トルストイにとって最高の女性像である。彼女は愛とエロスと母性を調和させるという困難な課題を課せられ、自らの驚くほど豊かな才能を注ぎこんでこの課題に立ち向かうが、敗れることは必定でもあった。トルストイは着想のごく初期からアンナの敗北を予感していた。アンナが試練に打ち勝つことができないのは、消そうとも燃え上がる彼女のエロスのためだ。しかしエロスは女性的なものとまた不可分でもあった。したがって女性性はそもそも初めから致命的な矛盾をはらんでいるのであり、だから生の拠りどころにはなりえず、世界の調和をうかがう基盤にもなりえない。アンナ・カレーニナの非業の死、それはトルストイが達したこのような結論がもたらした必然だったことが明らかにされる。トルストイは、エロスと母性を調停することができないならば問題それ自体を消去するという、考えられる限り最もラディカルな方法で問題を解決したのである。こうして本書は、「アンナを殺し、自分の内面の女性像を葬り、「女性性」を解体し、返す刀で生活の「非物質化」へと踏み出し、ニュートラルな裸のイデー、「善」と「愛」だけを残す」(259頁)ことが『アンナ・カレーニナ』を書き終えたトルストイの決断であったことを示した。「普遍的な愛」のみが残される代わりに女性性は破壊と悪の根源に姿を変えたことが指摘され、これらが「転回」の本質であり、ここからトルストイの創作活動の後期が始まることを明らかにした。

文豪のイメージに傷をつけることが恐れられたために、トルストイの女性関係に関する資料の公開は遅れた。これまで世に知られていなかった素材を精査し、未開野を拓いた本書の意義には大きなものがある。「幼年時代の愛と調和の再建への意志」と「トルストイ的美女」への執着という、根源的で相容れぬ2つの欲求は、彼の人生を絡み合せて貫いており、そこからあらゆる問題が生じ、解決されては、また新たな問題が生じていく過程は、さながら一編のドラマのようだ。一つ一つの作品に対する分析は鋭く、主流を占めてきた解釈は一瞥されたのち正しく退けられ、伝記的事実、思想の根源的動機に対する深い考察から個々の作品のイデー、構造、小説作法が捉え直されている。トルストイの行きついた、2つの動機は統合しえないという認識が『コサック』となり、虚構の世界での宇宙的統合が『戦争と平和』になり、動機そのものの解体が『アンナ・カレーニナ』となったという形で、一見内的連関が無いように見える諸作品がひとつの線で結ばれるのである。また、第3部の『アンナ・カレーニナ』論では当時の離婚事情やアンナが乗った鉄道に関する詳細な調査、未だモデルが特定されないクラムスコイの『見知らぬ女』とアンナの関係に関する考察など、多角的な方面から検証が行われている。これらの検討から得られた創見が、ロシアの文学・思想・歴史の研究に広く寄与することは疑いの余地を容れない。

振幅が大きいトルストイの前半性の軌跡と、文学からの逸脱とさえ言える「転回」が、自身の運命との徹底した闘いをもたらした必然だったことを本書は説得的に論じた。それだけにいっそう、その闘いの烈しさに圧倒されずにはいられない。トルストイは、「個人生活から社会生活全般、政治、経済にいたるまで規定してくれるような、巨大な一元的思想、広義の宗教」(5頁)をあまりにも強く求めたように思える。それは本書に書かれているように「ロシア人一般に見られる思考の型」(5頁)なのかもしれない、彼の情念さえ「珍奇どころか、むしろありふれたもの」(308頁)であったのかもしれないが、後期トルストイの歩みの根幹を成す「普遍的な善と愛」はどこか人工的で危うい感じを否めないものだし、「普遍的な愛」の教条化が彼の創作を生と死の、神と「邪悪な力」——内的矛盾を解決しえず、世界の中に調和した形で納める余地はないものとしてトルストイが棄却した女性性——の単純なドラマと化してしまったことは否定できない。本書の結論にはこのように書かれている。「外的必然の内面化と逸脱を、彼とともに全的に生きてみることに、それがトルストイを読むということだ」(312頁)。そのような読み方をする中で、前期のあれほどの創造を棄て去ってトルストイが一縷の可能性を賭けた後期の思想に、どのような意義が読み取られるのか。「普遍的な愛」はどこへ行きつくのだろうか——筆者の今後の研究の発展が心から待たれる。

(たかだ えいすけ)